

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370931

研究課題名(和文) フィリピン人エリートから見た「近代発展としての米国植民地支配」に関する研究

研究課題名(英文) The Filipino Elite and United States Colonial Rule as a New Path to Modernity in the Philippines

研究代表者

鈴木 伸隆 (SUZUKI, Nobutaka)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10323221

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は米国植民地支配の公共プロジェクトに着目し、その「寛容さ」に内在する矛盾が、被支配者であるフィリピン人エリート層を媒介にして、被支配者層である大衆には否定的に作用する逆説を解明した。その結果、米国が唱道する自由に共鳴するエリート層が、大衆に対しては、自由に振る舞うように強制する暴力的構造が明らかとなる。すなわち、植民地支配とは支配者对被支配者という二者間の権力関係ではなく、支配する側と支配される側の間に立つエリート層を媒介にして、大衆に否定的に作用する権力関係であることが浮かび上がる。

研究成果の概要(英文)：This study is to critically examine the interplay between U.S. colonial projects in the Philippines, mediated by the Filipino elite, and the masses as the colonial subjects, through the analysis of the multiple meanings of tolerance. As a result, it can be concluded that the elite, who were politically empowered and intellectually inspired by the U.S. colonial ideology, forced the masses to be more obedient subjects than ever. In other words, it suggests that colonial rule can't be simply reduced to a binary opposition between the ruling and the ruled. Rather, the intermediary between the ruling and the ruled may play a tremendous role in re/shaping the nature of colonial power relation in the Philippines.

研究分野：文化人類学

キーワード：植民地国家 フィリピン人エリート 米国植民地体制

1. 研究開始当初の背景

(1) 米国植民地下での「リベラル」とされた公共プロジェクトが、いかに人種差別的かつ暴力的であったかは、サルマンやラファエルをはじめとする多くの研究が指摘するところである。いずれも、米国植民地主義が巧妙な規律権力に満ちていた点で共通する。米国植民地主義の脱神話を試みたゴーは、支配者を例外視する植民意識こそ、米国人が自分たちの独創性である自由主義と同一視するための仕掛けだと分析する。

(2) 比較政治学の視点から、米国を考察した藤原帰一は、東南アジア諸地域を支配したヨーロッパ諸国(英国・オランダ)と比較して、米国植民地主義が「リベラル」であったのは、植民地帝国の新参者であったこと、海外植民地経験が皆無だったことと、無関係ではないと指摘する。帝国としての後発性ゆえ、被支配者からの政治要求(平等・自由・民族独立)を「寛容さ」の証として、流用せざるをえなかったという米国植民地主義の特徴が浮かびあがる。

(3) 一方、フィリピン人が米国植民地主義をなぜ「近代発展」と見なすのか、という問いに対して、「えせ学校教育」に洗脳されたと主張したのは、歴史家レナート・コンスタンティーノである。19世紀末のヨーロッパ自由主義思想に触れ、自由、民主主義、民族独立という理念を、自らの民族的政治要求として内面化し、宗主国スペインに突き付けていた。ところが、こうした近代思想受容をめぐるナショナルな起源は、フィリピン史叙述では忘却されざるを得ない。このために、米国の「寛容さ」とフィリピンの「従順さ」ゆえに、植民地状況下で近代発展が付与されたという歴史叙述が、支配者と被支配者の永遠の絆として、正典化されるのである。

(4) しかしここで再認識すべき点は、フィリピン人の主体性(エージェンシー)が、近代発展を正当化する米国植民地主義言説によって、過小評価されている点である。自由主義に傾倒するフィリピン人エリートは、米国との協調関係を強化するだけでなく、同時にエリート支配のヘゲモニーをも拡大させる両義的な存在である。このことは、「自由を称揚する者がなぜ内なる他者から無慈悲に自由を奪うのか」という竹中千春の問いと重なる。それゆえ、自由、平等、独立という民族的なスローガンは、彼らが各種国家開発政策へと大衆を誘導し、なおかつ実際には暴力的に排除するような資源の私物化と表裏一体だという新たな仮説が必要となる。

2. 研究の目的

本研究は、米国によるフィリピン植民地支配が「近代発展」の過程そのものであるとの植民意識を批判的に考察し、権力関係に内

在する矛盾を解明することにある。米国によるフィリピン植民地支配は、従来「近代発展」そのものだったと言われてきた。選挙法、三権分立、学校教育、公衆衛生といった公共プロジェクトに見る「寛容さ」が、その理由である。しかし、植民地主義を正当化する政治言説は、時として権力関係に内在する矛盾を隠蔽する。本研究は、米国が唱道する自由に共鳴する一方で、大衆との共存意識が希薄なエリート層が、彼らに対して自由を強制しようとする二面性を解明する。その背景には、国民的連帯を呼びかけながらも、実は自己権益を最大化しようとするハビトゥスが潜んでいると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、近代主体へと構造転換を図るフィリピン人エリートが、国民連帯を呼びかけながら、植民地体制を維持・拡大する一方で、自己の権益の最大化を狙う二面性、重層性を、3つの領域に分けて、歴史資料と人類学的手法を併用し、3カ年で行った。

文献収集調査は、一次資料が豊富な米国(米国公文書館、議会図書館)、フィリピン(国立図書館、フィリピン大学中央図書館、アテネオ・デ・マニラ大学リサーチ図書館)、日本(京都大学東南アジア研究所図書室、神戸大学経済研究所図書室)を対象とした。とくに、米国での文献収集に関しては、フィリピン植民地統治期資料を所蔵する米国公文書館(メリーランド州カレッジパーク館)で、フィリピン植民地政策を実質的に決定支配した米国陸軍島嶼局文書 RG350 を当たった。一方、京都大学東南アジア研究所図書室では、米国植民地期をカバーする英字日刊紙「マニラ・タイムズ(1900-1930)」と「トリビューン(1930-1941)」を閲覧し、必要に応じて複写した。

(2) 研究体制は、研究代表者(鈴木)以外に、海外共同研究者として、比米関係を専門とする歴史学者フェデリコ・マグダレーナ教授(ハワイ大学フィリピン研究所)が参加した。フィリピン研究を専門とする両者は、研究手法が人類学(鈴木)と歴史学(マグダレーナ)と異なるため、資料の解読や臨地調査成果等を相互補完でき、海外発信機能の強化できるという利点がある。なお、3カ年にわたる具体的な調査内容は、以下のとおりである。

(3) 平成25年度は米国植民地体制下での3つのアクター(米国植民地官僚、フィリピン人エリート、フィリピン大衆)の役割と公共プロジェクトに対する思惑や利害関係を、多元的な植民地空間の中から分析した。その結果、エリートと大衆間には著しい文化資本格差があり、国民創出のための公共プロジェクトがエリートに実質的に独占される状況が浮かび上がってきた。このことから、植民地

国家体制下でのリベラルな公共プロジェクト導入が国民的亀裂に転移する逆説が限定的だが、明らかになった。

(4) 平成 26 年度は 1913 年以降に植民地体制のフィリピン化が展開される過程で、フィリピン人エリート(政治家、地主、企業家が、国民経済の自立を目指して、商品作物(ココナッツ、タバコ、麻、砂糖)生産による農業開発を行う点に着眼した。具体的には地登記制度(1902 年)、公有地法(1903 年)、地籍法(1907 年)等による法制化を進め、公有地の私物化や農業開発に関連する公共投資を通して、大胆な利益誘導を推進する国民代表者たるエリートにみる理念と行動の乖離を分析した。このことから、民族自立に向けた現地エリートの選択が、自らの政治的経済的基盤を強化させると同時に、植民地体制を安定化させる作用があったことが、確認できた。

(5) 最終年度の平成 27 年度は、フィリピン偏重型政策により植民地体制が安定する 1920 年代以降、大衆が国家主導の開発プロジェクトから排除される主体構造転換を対象とした。具体的には、フィリピン北部・中部の米作地で生活が困窮し、人口増加によって農村や都市部での雇用問題が深刻化する中、現地エリートが貧困対策の一環として導入した社会正義プログラムに着目した。このことから、大衆にとって植民地支配とは、「上からの自由」を余儀なくされ、エリートに規律化・規範化させられる場であったことが浮かび上がってきた。

4. 研究成果

(1) 調査研究から明らかになった成果は、以下の 2 点である。

まず 1 点めは、植民地状況下での被支配者エリートの存在が、国民的断絶拡大に寄与したことである。支配者である米国と被支配者であるフィリピン人エリートの両者は、不平等な権力間関係にありながらも、植民地体制を維持・温存するという点で協動的であり、ウイン・ウインの関係を形成していた。それに加えて、フィリピン人エリートは植民地状況下でエンパワーメントされることで、新たな民主的な政治制度は、第一義的に少数派である自分たちエリートの権利と地位を擁護するための装置であると理解するに至る。すなわち、政治制度の恩恵に預かる対象から、大衆は排除されており、植民地支配下における国民的断絶は、このような認識のレベルにおいても、顕在化していた。

これに関して興味深いのは、同様のことが、キリスト教徒のみならず、ミンダナオ島在住のイスラム教徒エリート層とムスリム大衆との乖離状況においても、当てはまることである。このことは、米国植民地主義は民族や宗教といった境界を越えて、エリート層に親

和的であったことを示唆する。それゆえ、ムスリム大衆にとって、米国植民地主義は、フィリピン国民とムスリム社会内部での周縁化という意味で、二重の排除を意味した。

エリートは米国のエリート協調路線から、国家や法といった近代的な統治技術ですら、植民地体制下での自らのヘゲモニーを拡大する手段として理解した。それを駆使して、新たな国民の代表者として、利益の再配分を行う意識は極めて希薄であった。その意味で、20 世紀初頭のフィリピン人エリートの植民地経験は、フィリピン国民としての共同性形成に寄与するものではなかった。むしろ、否定的に作用し、国民的民族的断絶や亀裂を強めたと結論づけられる。

(2) 2 点めは、こうした亀裂や断絶が露見あるいは顕在化しなかった背景には、「近代発展としての米国植民地主義」という植民地言説がフィリピン人エリートの自己矛盾を隠蔽する作用があったということである。この言説は、そもそも米国が自らの支配を正当化するために考案されたものである。しかし、フィリピン人エリート層は、状況に応じて、そのイデオロギーと自己同一化を図ろうとした。上から付与された植民地制度(教育、政治、公衆衛生)の枠内で、彼らはその果実を積極的に吸収しようとした。

エリートが心がけたのは、「国民」「フィリピン国民」のためと、あくまでもパターン的に振る舞うことであった。「国民」という概念は当時、フィリピン大衆に共有されたものでなかった。すなわち、エリートが「国民」を語る際、国民とは誰で、どのような存在なのかを定義する権限はエリート層の側にしかなく、語られるべき「国民」が自明でない。共通理解が存在しない「国民」の代表者として、自ら振る舞うことで、自己の利益は国民の利害と一致する錯認に陥ることになる。

(3) 以上を総合すると、本研究が示すフィリピン人エリートの置かれた状況は、植民地主義の理念と行動をめぐる齟齬やねじれに引き裂かれざるを得ない、近代的主体としての 1 つの典型的な姿を示していると言える。それはエリート自身の出自と大いに関係がある。エリートの多くが弁護士あるいはジャーナリストという経歴であった。20 世紀という時代の転換点に立たされた彼らは、スペイン植民地時代のように、そしてフィリピンの英雄ホセ・リサールのように、反政府的な発言でも投獄されたり、銃殺されたりすることがないことを実感した第一世代であった。米国植民地状況下での民主的な政治空間の恩恵を被ったのが、まさに彼らだった。

他方、この振る舞いが許容され、容認されたのは、それが為政者米国にとっても、植民地フィリピンに民主主義の制度が浸透していることを示すショーケースとして機能したからに他ならない。すなわち、被支配者エ

リートが抵抗すること自体が、例外的に寛容な米国植民地主義の確たる証拠として、称揚されることになり、ここでも支配者と被支配者エリート層との相互依存・相互共犯関係が確認できる。

本研究が新しい知見として提示できることは、エリート層の植民地体制への協調路線が大衆に対しては、否定的に作用することである。このことは植民地支配に抵抗するナショナリストの存在は半ば神聖視されてきたため、殆ど指摘されることがない。ナショナリストが支配者に対してのみならず、国民に対しても、暴力的に襲い掛かろうとする両義的存在であることを再認識する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

鈴木伸隆、書評「『恩恵の論理』と植民地アメリカ植民地期フィリピンの教育とその遺制」、東南アジア 歴史と文化、東南アジア学会誌、査読無、45 巻、2016、154-159

Suzuki, Nobutaka, Regional Cash Crop Specialization and Single Male Migration in the Colonial Philippines, 1898-1939. The Journal of International Public Policy, Doctoral Program in International Public Policy, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba, 査読有、Vol.35、2015、19-40

鈴木伸隆、書評「フィリピン近現代史のなかの日本人 植民地社会の形成と移民・商品」、東南アジア 歴史と文化、東南アジア学会誌、査読無、44 巻、2015、158-161

Suzuki, Nobutaka, Upholding Filipino Nationhood: The Debate over Mindanao in the Legislature, 1903-1913, Journal of Southeast Asian Studies, 査読有、Vol.44、2013、266-291

Suzuki, Nobutaka, Najeeb Salleby and America's Colonial Governance of Filipino Muslims, Progressio: Journal of Human Development, 査読有、Vol. 5、2013、1-21

Suzuki, Nobutaka, Appraising the Significance of the Center for Southeast Asian Studies' (CSEAS) Library Collection for Philippine

Studies, Newsletter, 査読無、Vol. 69、2013、26-27

鈴木伸隆、書評「植民地近代性の国際比較 アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験」、人文学研究所所報、神奈川大学人文学研究所、査読無、50 巻、2013、171-177

[学会発表](計5件)

Suzuki, Nobutaka, Making Rubber Plantation in the Philippines: Colonial Desire and Nationalist Resistance, Kanagawa University Hakone Seminar, 2015 March 20, Kanagawa University Hakone Lodge (神奈川県足柄郡箱根町)

Suzuki, Nobutaka, Becoming a Better Muslim: American Colonial Education and the Shaping of Muslim Filipino Identity. Inaugural AAS-in-Asia Conference, 2014 July 14, National University of Singapore (Kent Ridge, Singapore)

Suzuki, Nobutaka, Making Mindanao as Christian Territory under the American Colonial Governance, Philippine Studies Conference in Japan (PSCJ2014), 2014 March 1, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University (京都府左京区)

Suzuki, Nobutaka, Colonial Education and the making of Muslim Filipino under American Rule, International Workshop on Cultural Diversity, 2013 September 29, Le Meridien Kota Kinabalu (Kota Kinabalu, Malaysia)

Suzuki, Nobutaka, Population Change and Economic Development in the Philippines, 1899-1946, The Eighth International Convention of Asian Scholars (ICAS8), 2013 June 26, The Venetian Macao-Resort Hotel (Cotai, Macao)

[図書](計3件)

Ikuya, Tokoro, Suzuki, Nobutaka 他、Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia, Tokyo University of Foreign Studies, 2015、41-70、298

鈴木伸隆、太田和宏、長坂格、清水展、フィリピンにおける人口問題と開発政策 新聞・官報等逐次刊行物を利用した調

査研究 成果報告書、筑波大学人文社会系、2014、3-27、82

永野善子、尾高煌之助、鈴木伸隆他、アジア長期経済統計（フィリピン編）暫定報告書、一橋経済研究所、2013、5-39、334

6 . 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 伸隆 (SUZUKI,Nobutaka)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：10323221